



19万人の  
ひろば

八千代市イメージキャラクター「やち」

### ありがとうございました

環境保護および停電時の備えとして、株式会社ノジマ様から寄附をいただきました。

- コンパクトソーラーライト10個
- 蓄電式ポータブルAC電源4個

## 市民会館開館40周年・リニューアルオープン記念 「ベートーヴェン：第九交響曲演奏会」を開催

「歓喜の歌」として日本人に馴染みの深い“第九”。市民会館の開館40周年とリニューアルオープンを記念して、9月23日、「ベートーヴェン：第九交響曲演奏会」が行われました。第九を披露したのは、この日の演奏会のために結成された「八千代第九合唱団」のメンバー。八千代市または近隣市に住む161人が一般公募で集まりました。4月7日に結団して以来、約半年間に30回に渡る練習を重ねてきました。中には合唱も第九も全く初めてという人もいましたが、短期間で集中して正しい発声や発音を学んだそうです。満を持して迎えた本番の日。会場は2階席まで観客



▲ソプラノ・アルト・テノール・バスのパートに分かれて合唱。第1部では八千代少年少女合唱団が「赤とんぼ」など5曲を披露しました

でいっぱい。ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉の演奏に合わせて披露された第九の合唱。心のこもった合唱に、観客からは大きな拍手が送られました。

## 「野菜づくりは楽しい」

農業交流センターオープン記念講演会

食べたい野菜を自分で作り、採れたての美味しさを味わえる。それが家庭菜園の魅力です。9月14日、NHK趣味の園芸「やさしの時間」でおなじみの藤田智さんが農業交流センターで公演を行い、100人が参加しました。藤田さんは秋田県の農家出身。29歳の時、お見合いに失敗し途方に暮れていた頃に偶然見つけた四葉のクローバーを育てたことが、野菜づくりを始めたきっかけです。講演では、育てた野菜をとおして家族の会話が生まれた大学生のエピソードに触れ、



▲美味しい野菜をつくるためのコツを紹介

家庭菜園の魅力を伝えました。「家庭菜園は生産者と消費者をつなぐ架け橋」と話す藤田さん。クイズなどを交えながらの講演に参加者は引き込まれ、あっという間の2時間でした。

## 被爆体験を後世に伝えるために 「はだしのゲンと語る平和と歌」を開催

原爆投下から68年。戦争や原爆の悲惨さ、残酷さを知ってもらおうと、9月23日、被爆体験講話「はだしのゲンと語る平和と歌」が勝田台文化センターで行われました。語り部は、幼い頃に広島市内で被爆した「八千代市原爆被爆者の会」の中村紘さんと小谷孝子さん。漫画「はだしのゲン」の紹介や腹話

術を交えて、核兵器の恐ろしさや平和の尊さなどを語りました。「当たり前前の生活ができることを幸せに感じてほしい」と小谷さん。会場を埋め尽くす大勢の参加者が2人の話に耳を傾けました。最後はソプラノ歌手・原口正子さんが「一本の鉛筆」「折鶴」を歌い、全員で平和を願いました。



▲「はだしのゲン」を紹介しながら、自らの体験を語る中村さん



▲腹話術の人形「あっちゃん」と一緒に、当時の様子を語る小谷さん



■ブックポストを増設 総合生涯学習プラザと村上公民館に図書館の本を返却できるブックポストを設置しました。



■食品の放射性物質検査実施中 消費生活センターで行っています（要予約）。検査時間は約1時間です。

### リサイクル・ガイド

消費生活センター 485-0559

●この欄については、消費生活センターへ。受け付けは、土曜・日曜日、祝日を除く午前8時30分から午後5時まで（午後4時～5時は 483-1151へ）

【あげます】▶七五三着物一式 ▶反射式天体望遠鏡（中学生向け）

【ゆづります・有料】▶雪道用スーパーザイルタイヤチェーン（205/65 R 16）▶パディック更紗（スカーフ・数点）▶ベビー寝具一式（ウォッシュャブル）

### やちよ川柳

八千代川柳連盟選

老け方を互いに見合う同い年 村上団地 押切 拓郎  
妻の愚痴ミキサーかけて一気飲み 高津 長谷川みえ子  
中元のそうめんづくし秋の膳 米本 西澤はるか  
腹の中嘘は隠せぬリトマス紙 緑が丘 佐々木長司  
渾渾とわき出る水に命みる 勝田台 大石しずか  
相槌は打つがウンとは言わぬ人 勝田台 石井 恒生  
打ち水に雨水を貯めるエコ意識 吉橋 根岸 ムベ  
水柱も大汗をかきダイエツト 勝田台 三宅 洋子

### 八千代歌壇

八千代市短歌会選

麻痺残り左手で書きし夫の文精一杯の「いつもありがとう」  
（高津 団地） 石井 孝子  
徘徊の夫を探して出会いたるこの坂に孤りの影長く引く  
（八千代台東） 高橋マサ子  
八月も僅かとなりて風変わり花白く夕闇に浮く  
（八千代台北） 水野大佳代  
とき水の僅かばかりを溜めおきて猛暑に喘ぐアロエに注ぐ  
（大和 田） 秋山富美子  
病室の窓に広がる森の樹々一群の竹はたおやかに揺れ  
（上 高野） 上岡あや子  
連日の猛暑に負けず葦草は冷房機の下の水でうるおう  
（八千代台北） 石川 静子  
処暑すぎて眠れぬ夜は一刻の熱気にあえぎ虫鳴くを聞く  
（八千代台西） 井沢 志麻  
二十日ぶり降り出した雨風を呼び乾きし土の匂ひを運ぶ  
（八千代台南） 一戸 光代

選評 一首目「ありがとう」という言葉は日常よく使われる私達は自らもたびたび口にすると、耳にする。このうたのひたむきな「ありがとう」は読む人に内省的な驕りを与え改めて「精一杯」という言葉に心動かさずにはいられない。二首目、かつての夫の介護の日の記憶であろうか。探し探してこの坂で行き会ったあの時。影長く引くに悲しみがこめられて居る。三首目、風と花と夕闇が作者の内面にある同質感を持って響いて来て夏の終りを感じさせる。初句のうまさ。

広報雑記帳から 広報やちよでは年3回、青少年版を掲載しています。これは市内の各小・中学校、高校から選ばれた41人の児童・生徒に、決められたテーマや社会の話題に対する意見や感想を寄せてもらうもの。11月15日号の掲載に向け、記者から原稿が届いています。子どもたちは毎回限られた時間の中で、しっかりと自分の考えを書き添えてくれます。大人にはない発想や鋭い視点に、「なるほど！」と感心させられることも度々。紙面の都合もあり、毎回全員の名前が紹介できないのが残念です。今回はどのような原稿が集まるのでしょうか。楽しみます。